

いのちをいただく

その絵本の帯に、一人の名もない主婦のメッセージが書かれていた。

「朗読を聞いて、うちのムスメが食事を残さなくなりました」

絵本に「坂本さん」という人が登場する。実在の人物である。

坂本さんの職場では毎日毎日たくさんの牛が殺され、その肉が市場に卸されている。

牛を殺すとき、牛と目が合う。そのたびに坂本さんは、「いつかこの仕事をやめよう」

と思っていた。

ある日の夕方、牛を荷台に乗せた一台のトラックがやってきた。

「明日の牛か・・・」と坂本さんは思った。

しかしいつまで経っても荷台から牛が降りてこない。不思議に思っただけでみると、

10歳ぐらいの女の子が、牛のお腹をさすりながら何かを話しかけている。その声が聞こえてきた。

「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ・・・」

坂本さんは思った、「見なきゃよかった」

女の子のおじいちゃんが坂本さんに頭を下げた。

「みいちゃんはこの子と一緒に育てました。だけん、ずっとうちに置いてくつもりでした。

ばってん、みいちゃんば売らんと、お正月が来んとです。明日はよろしく願います・・・」

「もうできん。もうこの仕事はやめよう」と思った坂本さん、明日の仕事を休むことにした。

家に帰ってから、そのことを小学生の息子のしのぶ君に話した。しのぶ君はじっと聞いていた。

一緒にお風呂に入ったとき、しのぶ君は父親に言った。

「やっぱりお父さんがしてやってよ。心の無か人がしたら牛が苦しむけん」

しかし坂本さんは休むと決めていた。

翌日学校に行く前に、しのぶ君はもう一度言った。

「お父さん、今日は行かなんよ!(行かないといけないよ)」

坂本さんの心が揺れた。そしてしぶしぶと仕事場へと車を走らせた。

牛舎に入った。坂本さんを見ると、他の牛と同じようにみいちゃんも角を下げて威嚇するポーズをとった。

「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならないとみんなが困るけん。ごめんよう」

と言うと、みいちゃんは坂本さんに首をこすり付けてきた。

殺すとき、動いて急所をはずすと牛は苦しむ。坂本さんが「じっとしとけよ、じっとしとけよ」と言うと、

みいちゃんは動かなくなった。

次の瞬間、みいちゃんの間からは大きな涙が落ちた。

牛の涙を坂本さんは初めて見た。

心を込めて「いただきます」「ごちそうさま」を

